子ども学試論３

# 1980年代における近代知の変革と子ども論の浮上

白梅学園大学 子ども学部 子ども学科
准教授　首藤　美香子

## 1．子ども学研究の現在

２００２年以降、学部・学科に「子ども」を冠した大学・短期大学の創設が続き、推計によれば２０１０年には１００近くに達するという。それにあわせて、子ども学に関するテキストや研究論文集、子ども学をめぐる講演・シンポジウムの採録集なども、幾つか発刊されてきている。

大学が知的エリート養成から大衆に開く時代を迎え、最高学府におよそ似つかわしくないような、「子ども」というひらがな表記を含む〈柔らかい〉見た目と響きをもつネームを大学の「顔」に掲げることで、変化が演出され、ぐっと親しみやすさが増した。しかしそれは、アカデミズムの体質、すなわち伝統的秩序や権威を尊重し、研究の純粋性・正統性を保持しようとするあまり理念が先行しがちで、その現実に妥協しない批判的精神が時として知的想像力／創造力を枯渇させ、形式主義や排他性、閉塞感に陥る危険性をも孕んでいた〈硬さ〉を穿ち、風穴をあける効果はあったのだろうか。

浜田（２００９）が指摘する通り、「子ども系」学部・学科の濫立の背景には、保育・教育系の大学が生き残りをかけ「子ども」という「目を引くネーミング」を

冠して入学生の確保を狙うきわめて現実的な選択がなされていることは否めない。中村勝美（２０１０）は、保育・教育・福祉・心理学科を前身とする「子ども系」学部・学科は、これらの学問領域を基盤として子どもを総合的に学ぶことを目的としつつも、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭等の子どもに関する専門資格取得のための教育課程を複数開設することで募集枠を広げ、経営面の安定をはかることが企図されている点にふれ、「子ども系」の学部・学科の増加は必らずしも子ども学研究の進展に貢献しているとは言い難いとする。つまり、中村が看破するのは、世に出るときに多少なりとも有利になる資格取得のための、現実即応的で問題解決型の実技実学の総体を子ども学に求めながらも、「子どものため」を方便に新興学問領域としてカムフラージュしているお粗末な内情ではなかろうか。

また中村は、「子ども学とは、一人ひとりの研究者が、日々営む研究活動の中で、必要な関連する学問的知見を自分なりに学びながら、一つの学問領域に固執せず、活動のなかに存在する」という考えに対して、「子ども学とは、新しい学問・科学というよりも、子ども研究の理念や姿勢を表したものとして理解でき」るが、このような立場にたつ子ども学では、「科学としての方法論や学問体系の確立を指標とし、伝統的枠組みで『子ども学』の制度化を論じることには、さほど意味がない」ことになってしまうのではないか、と疑問を呈する。北本（２０１０）も、今日の子ども学部・学科創設のブームは「確かな学術的基盤と展望をもたない上滑りの感が否めない」とし、「『子ども理解』と『子育て支援』を御旗に『子ども』という概念に『集中』した、その場しのぎの再編の動きのように見える。そこには学術的な見通しが共有されているわけではなく、プラグマチックに、ある種の便宜性と閉鎖性が漂っている」と容赦ない。

北本は、子ども学研究の置かれている現状について、「かつてのような幼児教育学や保育学、あるいは家政学の対象として子どもを文化や社会、そして歴史から切り離して狭く捉え、教育学の体系において周縁的な位置しか占めてこなかった時期をようやく後景に置き、今日では子ども学は福祉国家の政策課題として前面に浮き上がっている」と期待しながらも、「その学術的な構造の解明を経ることなく、いっそう現実的な、時として皮相な、実践的であろうとする断片的で部分的な論究が一方にあり、また体系的であろうとして現実離れした抽象的な論究が他方にある」と、批判する。北本は、子ども学が福祉と教育の歴史的展望をひらくものだと捉え、その基礎概念の構成的再編という積年の課題の解明を今こそ急ぐべきだとし、子ども学の学術的基盤の指標あるいはカテゴリーがどのような分布と

構成をなしているか明らかにすること、それによって近年の学際的なメタ科学としての「Childhood Studies＝子ども期研究」の高まりが示唆するものはなにかを探ること、さらに子ども学を子ども観の社会史的構造転換のなかに位置づけることを試みようとする。

北本のように近年の子ども学の新展開における学術的カテゴリーの概念構成と分布を検証し、子ども学研究の諸課題を歴史的に概観しようとする本格的な取り組みとは対照的に、学部・学科で子ども学を掲げることの正統性を立証し権威づけをはかるため、子ども学につながる系譜を過去に求め、その継承者たらんことを表明しようとする野心的な試みがある。また、子どもの問題―たとえば育児不安、学力低下、虐待や貧困、遊び環境の劣化、子ども文化に対する商業主義の横溢などなど―の解決に示唆や教訓を得ようと先行研究をあれこれと発掘し、今日的な価値観や解釈をもとに拙速な評価を下そうとする向きもある。それら歴史探訪は緒に就いたばかりとはいえ、各時代の社会・文化的な文脈を軽視するきらいがあり、方法論的にみても妥当性を精査する必要があるのではないかという印象は否めない。しかし、子ども学を歴史的に位置づけ、未来につなげようとする前向きな取り組みであることは確かだろう。

ところで、子ども学の軌跡を辿ろうとする作業において共通に認識されていることのひとつは、日本の子ども学研究の転換期が１９８０年代にあたるという点である。それは、この時期に、保育・教育・福祉・心理といった従来の子どもを直接研究対象としてきた分野以外で、子どもに焦点をあてた論議が活発化するからである。

## ２．１９８０年代における「実態としての子ども」をめぐる状況

１９８０年代に勃興してきた子ども論についてふれる前に、１９８０年代は子どもにとってどのような時代であったのか、その社会・文化的な背景を簡単に振り返ってみたい。

１９７３年のオイルショックによる構造不況から１９８５年のバブル期到来までの、長期的な景気低迷が続くなかで生まれ育った世代には、いくつかの注目すべき特徴がある。まず、団塊の世代の婚姻率・出産率が１９７１年～７４年の間に高まり、第二次ベビーブーム（団塊ジュニア世代）がもたらされた結果、１９７８年には全国で小学校入学者は２００万人を突破、特に１９７９年には東京板橋区立の小学校は児童数４万２２４９人と最多を記録し、続く１９８０年代においては一時的に膨れ上がった団塊ジュニア世代が

学校生活の中心に躍り出てくる。しかし、その後は急速に少子化傾向に入り、20年後の１９９８年には、出生率は１万５６２２人と約３分の１にまで減少していくなど、１９８０年代は人口構造の転換点に位置づく。

団塊の世代は、男女共学の平等理念の下で学び、公権力への従属や社会倫理の尊重よりも自分の欲望の充足を最優先させ、消費を通じて自己実現をはかるという新しいライフスタイルを形成した最初の世代である。その彼らが子どもを持ち人口比で絶対的多数を占めた結果、子どもの消費文化の発展を牽引していった。実は団塊ジュニア世代に特有の文化体験や嗜好が、特定のアニメ・ＳＦ・マンガ・アイドル・ゲームを愛好する「オタク」文化の源流となっていくのである。

さらに、団塊世代以降、出自に関係なく、受験戦争を勝ち抜き社会階層の上昇を目指す学歴主義が一般に浸透していったわけだが、１９７０年代後半より、親の期待を一身に背負い塾通いする子どもが急増し、偏差値や内申書が進路決定の重要な指標となってくる。それと平行して、少年非行と校内暴力が教育の荒廃を示唆する社会問題として注目されはじめ、学校現場は細かい校則や時には警察力導入による厳しい管理体制で対応しようとしていった。

戦後の25年間の間で家庭のなかに浸透していったテレビ放送、それに代わる遊び場の激減、自然環境の破壊、食生活の変化、受験戦争などの子どもを取り巻く生活変容の弊害は、１９７０年代から１９８０年代に至り、かつてない身体異変や精神疾患の形をとって子どもの間に顕在化してきた。たとえば子どもの肥満や小児成人病、アレルギー障害、思春期の女子学生の過食症・拒食症などである。子どもたちの間で筋力や柔軟性といった基礎体力の低下はもはや避けられない事態となっていったのもこの時期からである。

１９７０年代の不況を乗り越え、１９８０年代後半には日本は未曽有の円高時代に突入し、国際化が一気に進行、株価や地価の高騰を背景に人々の消費意欲が異常に膨れ上がった。景気の好転と「ジャパンアズ№１」という国際社会における日本の経営方式や技術に対する自信は、社会構造において情報・サービス産業の発展とそれへの依存を加速させることとなる。

１９８０年代に生まれ育った世代において特筆すべき文化体験としては、ゲーム機器の進化とソフトの多様化であろう。「家庭用カセット式ビデオゲーム」ファミコンが任天堂から発売されたのは１９８３年だが、その後「ドラゴンクエスト」「ファイナルファンタジー」など、映像技術の高度化や情報容量の拡大により、スピードやスリル、戦闘性、「ＲＰＧ（ロールプレイゲーム）」のように物語への参加意識を促す複雑なドラマ性を加味したシリーズが次々と発売され、現代に続くメ

ガヒットを生みだしていく。それは子どもにとって、野外の自然よりも電子空間上が身近な遊び場となっていき、仮想現実での疑似体験が子どもの経験世界を拡大していくことを意味する一方、生身の子ども同士がぶつかり合い、身体感覚を通して互いに理解しあう機会が失われていったともいえるのである。

ところで１９７０年代末より社会問題化した子どもの暴力は、１９８０年に川崎市で予備校生が両親を金属バットで殴って殺害した家庭内暴力事件を契機に、世間を大きな不安と動揺に陥れた。少年非行と校内暴力は学校権力の拡大により沈静化されていくが、代っていじめと登校拒否に人々の関心が集まっていった。どう理解し対応してよいかわからない子どもの「荒れ」の原因を、不十分な親のしつけや学歴社会の弊害だとする論調が一般に強くなり、１９８５年には、文部省が核家族の進展による家庭教育の低下を憂い、戦後はじめて「親向けの家庭教育手引書」を発行した。そうした公権力による統制、すなわち「家庭」や「母性」のあり方を問題視する議論に対して、女性自身からの異議申し立が出され、性別役割分業や近代教育のあり方そのものを見直す必要性を迫っていったのである。

ここで興味深いのは、新しい視点から「子ども」や「子どもらしさ」の価値や意義を積極的に認めた児童文学や絵本、漫画、アニメ、映画、演劇などが、この時期子ども以上に多くの大人から共感を得た点である。例えば、子どもの無意識の世界とその野生や攻撃性の表出が巧みに描かれた、センダックの『かいじゅうたちのいるところ』、無力な周縁的存在であるがゆえに世界の危機を救済する役割を担った、エンデの『モモ』、宮崎駿の『風の谷のナウシカ』、三世代家族と級友たちの間で親密で小さな幸せに満ちた子ども時代が回想された、さくらももこの『ちびまる子ちゃん』、自然や動物との豊かな共生をうたった『トトロ』などがその代表であろう。

アメリカナイズされた「愛」と「夢」と「冒険」の世界が演出されたテーマパーク「東京ディズニーランド」の爆発的人気や、「大人になれない子ども」に憧れる「ピーターパン症候群」は、現実逃避の側面も否めないが、大人と子どもの境界が曖昧になっていく典型的な例といえるだろう。

この時期に育った子どもたちの中には、成人した後、次に問題となる「ニート（＝NEET: 職に就いておらず、学校等の教育機関に所属せず、就労に向けた活動をしていない15歳から34歳の未婚者）」になった者が多い点も留意すべきある。

そして、１９８９年には合計特殊出生率が戦後最低の1・57となり、少子化問題がにわかに世間の注目を浴びることとなる。少子化は将来の労働力や税収、社会

保障財源の確保に深刻な影響をもたらすだけでなく、地域社会での子どもの遊び集団や学校教育の質、家庭生活、親子・仲間関係など、子どもの育ちそのものにも少なからぬ影響を与えていくことになる。しかし、こうした子どもの育ちの視点から少子化問題を扱う論客は少なく、むしろ現行の制度をどう維持するか、さらなる経済発展を遂げ国際競争に打ち勝つために、女性の労働力をどう確保するかに議論が集中し、子育てが母親の「足枷」にならないようにするために子育て支援が必要だという、子どもの利益よりも大人本位の論理が優先されていく。

## 3．子ども学研究の転換期としての1980年代

このように振り返ってみると、1980年代は、日本が少子化へと大きく舵をきりはじめる過渡期にあたり、産業構造の転換によって戦前と戦後世代の間での生活様式や価値観の断絶が顕在化していったことがわかる。物質によって自己の欲望を充足させる消費文化が台頭してくるとともに、成熟した知性や教養を必要としないマンガやアニメ、ゲームなどサブカルチャーが若者たちを魅了し、個人による生き方の自由な選択や個性的な嗜好が公に認められるようになった。一方で、学校教育はますます管理強化に走って子どもの抵抗や暴力を封じ込めようとし、それと並行するかのように子どもの心身にはかつてない病変が顕れはじめ、その責任が母親や家庭教育に押しつけられる。さらには、子どもの周辺には、生身の人間の感情や利害が直接対決する現実ではなく、映像世界が身近にせり出してきて、コミュニケーションのあり方を大きく変えていった。こんなふうに、この時期をひとまとまりに整理することもできるだろうか。

そうしてみると1970年代末から1980年代は、子どもの危機、子ども受難の時期としてネガティブに捉えられるかもしれない。ある意味では、大人が自分の子ども時代を参照しながら子どもを育てていくことを難しくし、めまぐるしく転変する社会環境のなかで、かつての子どものような子ども時代と居場所が失われつつあったにもかかわらず、当事者である子どもにも大人にも、リアルタイムでの変化の実像と、変化によってもたらされる子どもの成長・生活への様々な影響と、子どもの問題と向き合う方法の妥当性が十分に自覚されないまま翻弄されていたともいえようか。いうならば、今日まで続く、子どもを産み育てる安定した基盤の揺らぎと方法的な行きづまりが少しずつ認識されていった時期ともいえよう。無論、親も教師も医者も実験心理学者も施設職員も手をこまねいていたわけでは

なく、その時その時で最善と考える判断をもって、目の前の問題解決に奔走していたのは事実である。その献身的な努力を否定するつもりは毛頭ない。

しかし、こうした「実態としての子ども」を取り巻く状況の変化にどう対処するかという子ども論とは別に、この時期、全く新しい子ども論が登場してくる。新しい論者たちは、切迫した子どもの現場からは距離があったがゆえに、子どもを通して見えてくる時代の揺らぎや方法的な行きづまりをいち早く察知し、子どもという視点から社会のあり方と、それを根底から支えてきた近代の知そのものを根源的に問い直すことのできる機会だとポジティブに捉えた。つまり、「子どものためによかれ」としてきた既成の知の方法論的枠組みでは対処できなくなっている様々な現象を前にして、秩序の崩壊を阻止し体制を死守しようとするのではなく、子どもをめぐる危機や受難は子どもから大人に向けられたメッセージであるとの発想の転換をはかることで、婉曲的ではあるが、子どもの救済と社会の再生を企図したのである。

ところで前々回ふれたとおり、19世紀末に欧米と日本で始まった児童研究運動では、子どもに関する科学的なデータの集積により国家教育の基礎を築くことが第一の目的とされた一方、子どもを学術研究の対象に据えることで諸科学が活性化され、人間の解明が進むことも期待されていた。すなわち、児童研究運動では「児童」をキーワードにして、人文科学・社会科学・自然科学の各領域、理論と実践、専門家と一般読者、人間と動物、大人と子ども、空間の境界、世代間の格差、階級のちがいを乗り超え、既存の知の体系を内側から突き崩そうとする「越境性」にこそ存在意義があったと指摘した。が、その「越境性」が弱点でもあり、児童研究運動が発展的に継続しなかった理由のひとつでもあったことにもふれた。このように、アカデミズムの周縁に位置し研究対象として疎外されてきた子どもを探索の視野に入れることで、既存の学問体系の限界を意識化し、その「内破」が児童研究運動では目指されたわけだが、そうした問題意識の延長線上として再浮上してきたのが、1970年末から80年代にかけて、哲学、文学、社会史、文化人類学、民俗学、宗教学、深層心理学、現象学などによってなされた子ども論であるといえる。この時期の子ども論の大きな特徴は、我々が無意識裡に捉える子ども観に対する異議申し立てとその問い直しである。

## 4．1980年代における「概念としての子ども」の焦点化

1980年代に最も広く子どもへの関心を触発した

のは、１９８０年に翻訳出版されたＰｈ・アリエスの『〈子供〉の誕生―アンシャン・レジーム期の子供と家族生活―』であったのは周知のことである。『〈子供〉の誕生』という大胆な日本語タイトルは本書の中心的なテーゼから付けられたわけだが、原題は『アンシャン・レジーム期の子供と家庭生活』であり、アリエスの意図は近代における人口の転換、すなわち出生率の減少の背景に家族と子どもに関する人々の意識の変化を読み取ろうとするところにあった。

アリエスはいう。「生、死、性、出生」に注目するのは、これらの現象が「生物学に属していると同時に社会的な意識のあり方（mentalite）にも属し、自然に属すとともに文化に属す」ゆえんであり、人間の心性の歴史と社会の深層を掘り起こすに最もふさわしい視座を提供するものである、と。したがって、アリエスが焦点をあてるのは、「実態としての子ども」ではなく「概念としての子ども」である。そして、「子どもを教育と保護の対象とする子ども観は、ある時代に発見された歴史的産物」に過ぎず、「子どもとは、国家、社会、共同体、家族や親、他の子どもとの相互連関のなかで多様な意味と価値を付与される関係的な存在」と規定する。

家族や子どもといった日常にありふれた身近な対象に対してですら、人々の感情や態度、認識は普遍ではなく、時代とともに変化する可能性を示したアリエスの研究は、「実態としての子ども」を直接の研究対象とする教育学者や発達心理学者の問題意識に直接的影響を及ぼすことは少なかったようだが、興味深いことに、それ以外の幅広い分野の研究者の関心を惹くこととなる。たとえば新しい子ども論では、子どもの共通感覚や身体性を基軸とする存在のあり方、前言語的な無意識の次元で表現される想像力の世界の豊かさ、子どもの遊びが作り出す強烈な異空間の構造、世の矛盾を鋭く突き既存の秩序体系を揺るがすような暴力性や逸脱行為、神や自然と交感する無垢なる精神といったものに目が向けられ、「子どもを子どもたらしめている原理」とは何なのか、共感をもって語られはじめる。それは、子どもに未来の大人としての役割を期待し、抑圧と監視の目を光らせてきた大人が、逆に子どもの眼を取り戻すことにより、自分達の世界の歪みを再点検し、修正ある可能性を探ろうとするものでもあった。

周知の通りこの時期は、ポストモダンと呼ばれる近代の超克を試みる新しい思潮が席巻しはじめており、子どもとは一見無縁なポストモダニストたちによる「概念としての子ども」への接近は、近代特有の「教育と保護の対象としての子ども観」を前提に構成されている大人社会の規範や倫理体系の限界を見極め、経験的合理主義に拘束され計測可能な客観的事実のみを真理

とみなす見方を否定し、多様性と異質性に満ちた「人間の生の現実」を理解するための接点を喪失しつつあった近代知のパラダイムの解体へとつなげる挑戦でもあった。そして、その裏には「実態としての子ども」の問題解決に従来の学問的枠組みが機能不全に陥っていることへの痛烈な批判が読み取れ、「実態としての子ども」を捉えるまなざしの相対化が「概念としての子ども」から試みられたといえる。

たとえば柄谷（１９８０）は、明治20年代文学における「近代」「文学」「作家」「自己」「表現」という近代文学の装置の、起源から終焉までの過程を精神史的に描写した著作のなかで、「児童」は「文学」の発見と「文学」で表現されるべき「内面」や「風景」の発見を待たずして「発見」されなかったと説き、ロマン主義から自然派文学への移行の背景にある認識の断絶と転倒を読み解こうとする。すなわち柄谷は、児童文学史の通説では「真に近代的な児童文学」の生誕を小川未明あたりにおき、児童文学が大人の文学者の詩、夢、退行的空想として見出されたことが批判の的とされ、未明の童話作品が根本的には「子ども不在」で「真の子ども」ではないとされていたことに対して反論する。つまり、「現実の子ども」や「真の子ども」とは、本来作家の内面に憧れや理想のイメージとして表象されてのちはじめて、「風景」と同じく眼前にある客観的事物として対象化されるのであって、観念がリアリスティックな写実的描写を引き出し、「現実」や「真実」があとから見出されるものだと主張した。そして、重要なのは、この「真の子ども」「現実の子ども」発見に至るまでの歴史性であり、「発達」や「成熟」、「子ども期の遊び」、「子どものための文学」は、大人と子どもを分割する認識の発見によって不可避的に現出したもので、「われわれは隔離された幼年期をもったがゆえに成熟不可能なのではなく、成熟をめざすゆえに不可能なのだ。」と逆説的に捉えるのである。

同じく中村雄二郎（１９８３）は、バリ島の伝統文化を例に近代の二分法的思考を超える「演劇的知」とは何かについて論じた著作において、〈子供〉や〈教育〉が、〈見えない制度〉＝無意識に形づくられた制度、私たちが共同体のなかで営む生活を暗黙のうちに律している約束事」つまり私たち人間の心の憶測に働きかける力をもって支配する「制度化された観念」「惰性化された観念」によって呪縛されており、その〈見えない制度〉は「〈子供〉という存在を自明なものとして捉えるまなざし」をも拘束しているとする。そして、アリエスの『〈子供〉の誕生』は、フーコーの『狂気の歴史』やレヴィ＝ストロースの『野生の思考』に匹敵する重要性をもち、彼等によってなされた〈見えない制度〉すなわちヨーロッパ社会の内部と外部で見捨てられて

きた狂人と未開人という深層の人間の発見が「囚われの〈知〉から自己を解放する力」をもったのと同様に、アリエスによる〈子供〉の発見も、囚われない「眼」で在るがままに見ることを妨げられてきた〈子供〉の問題を、惰性化した専門的な知の弊害から打破するものだとした。

さらに中村は、「家庭や学校での〈子供〉の暴力は、私たち人間の生活が本来もつべき厚みと多義性を失って薄っぺらになったことの尖鋭的なあらわれ」だとし、「生活の厚みや多義性のないところでは、文化の問題はもちろんのこと、社会や政治の問題も根底を失って空転せざるをえないだろう。いや、それだけでなく、硬直した頭の持主や大小の悪質なデマゴークを生み出し、真の直視すべき問題や深く掘り下げていくべき問題から人々の目を逸らさせることになるだろう。少なくともそういうかたちで、〈子供〉の問題は広く文化・政治の問題にも繋がっている」と、子ども論は「子どものため」という枠を超えた文化や政治の次元でも論じられるべきだと主張したのである。

山口（1976）は、神話や伝説、儀礼、芸能、文学や絵画などに登場し、その異様な姿形と攻撃性や猥雑さ、笑い、悪徳、狂気を武器に、社会の周縁から中心に介入して世界の秩序を撹乱しようとする「道化」の役割について論じた著作で、子どもの絵本の魅力についてふれている。たとえば、センダックの作品に登場する悪戯者の主人公の能力は、「大人の押しつける道徳と秩序の世界の軌道から簡単に離脱して、自分たちが、そこでは混沌の傍らに身を置いて蘇る道化の遊戯空間を醸成することにたけた、子供なら潜在的に誰でも持っている能力に見合うもの」であり、絵本で表現された「子供」とは、「ある意味で、精神が表層の現実を超えて、深層の現実に達する助けをなすもので」、「まさに大人の魂が無垢の性質を帯びて『失われた時間』の回復を遂げる役割を果たす」ものだと捉え直す。そして、「子供の世界こそ、人間意識の深層の構造が表面化する第三の領域」として注目したのである。

本田（1986）によれば、山口が「子供の世界こそ、人間意識の深層の構造が表面化する第三の領域」として重視した理由は以下の通りである。すなわち山口は、新しい人間科学を構想する上で有力となる深層解読の領域を三つ想定した。第一の領域は精神分析学であり「人間の深層心理に下降することで、表層では捉え得ない様々な現実を構成するイメージとの遭遇を可能とする」。第二の領域である文化人類学は、「異質な社会や文化との出会いを通して、精神のあり方、儀礼、象徴などを手がかりにしつつ、私どもの世界では表面化し得ないパターンを解読し、世界に対するトータルな視点の確立を企てた」。そして、子ども研究は「私ども

が社会化の過程で喪失した世界との接触の仕方を、彼等の言動を通じて垣間見ることができる」深層解読の第三の領域に当たり、象徴論的位相で展開される子ども論の可能性がここにあるとした。

子どもを「異文化」として捉える独創的な子ども論を提示した本田（1982）は、「象徴としての子ども」によって覆われていた深層が露わにされ、消滅しかけていたものが奪い返される「異化効果」に注目し、大人から子どもを隔てる「異文化性」を挑発的に描き出そうとするものであった。

## 4．1980年代の子ども論が示唆したもの

上記のような子ども論は、まさしく我々の子どもに対する意識の深層のありかを鋭く突くものであったが、現実の位相で山積する子どもの問題解決にあたっては即効性や具体性に欠けており、そのため子どもと直接対峙する現場からの反応は鈍く、部外者の無責任な「知の遊び」「知の戯れ」と一笑に付されたふしもある。残念なことに、知の巨人といわれる人々と彼等を信奉する一部の研究者の関心領域から「概念としての子ども」理解が一般に拡充することは少なく、1990年代後半のバブル崩壊と期を一にする形で後退するポストモダンとともに、近代知の超克論は有効性を失ってしまう。そして、ポストモダンへの反動からか、アカデミズムは旧弊な科学志向や形式的実証主義、細分化された専門分野に自閉する排他主義を加速させて先祖がえりし、他領域と結び合うことで開花したおおらかな知的想像性／創造力も、時代や社会のあり方を根源から問う批判精神も色褪せることとなる。

さて、大学再編に伴う今日の「子ども系」学部・学科創設ブームだが、保護と教育を要する未発達で未成熟な欠如態として子どもを捉える思考枠組の呪縛は相変わらず強く、子ども理解のための方法論的精度を高め、その確実性や有効性を個別の事例や数値で実証していくことと、子どもの問題解決に資するとされる子ども支援の包囲網を徹底整備し、職業的専門家の育成を目指そうとしているようにみえる。

最近出された子ども学に関するテキストや研究論文集、子ども学をめぐる講演・シンポジウムの採録集をみてみよう。たとえば、中井（2008）は「観念的な子ども学を目指すのではなく、生活科学という学際的な視点から、今の子どもたちが抱えている諸生活問題を調べるとともに、それらに対する改善策を具体的に考察し、子ども支援諸機関に向けて発信・提言することを目的とする」。小林（2008）は「『子ども学』としてやらねばならないことは、1989年に『子どもの権利条約』が採択されてからの新しい児童観の確

立がまずあろう。そして、子ども問題の解決、さらには子どもの生活を安全に、楽しくできるようにするチャイルドケアリング・デザインすることである」。要するに、小笠原（２００９）の「わが国の学際的な『子ども学』（研究）子ども問題に関係する情報を基礎に、さらに展開する一つの方向として『進化する子ども学』には、子どもの生命（心）を豊かにする『子ども支援・子育て支援』の実践的な観点が不可欠となっている。その高度な専門家を養成することが『子ども学』（研究）いま要請されている」に代表されるように、子どもの問題解決には専門家の「支援」「ケア」が不可欠であることが強調されるものの、専門知の妥当性や限界を問う声はあがってきていない。

浜田（２００８）は、「子どもにかかわる問題を『子ども学』の構想のもとにまとめ、解決の方途を求める気運が高まってきている」ことを受け、子どもの世界を新たな目でとらえ直し、子どもと大人の新たな関係を模索するために、『子ども学』として取り上げられるべき問題群を自由に選んで、主種々の観点から議論する場を設定する」初回の取り組みにおいて、「子どもたちの前に広がるこの『新しい狼のいる世界』」に対して赤ずきんたる子どもの安全・保護と自立をどう考えるか提起しようとする。しかし、こうなってくると、子どもはいつ狼に襲われて生命を落とすかわからない赤ずきんのように、騙されやすく知恵の浅い弱々しく頼りない存在であり、猟師という専門家の助けを借りなければ、人間としてまともに生き伸びることはできない存在となっていくのだろうか、疑問である。

他方、「子ども系」子ども学研究の埒外では、なんともユニークな子ども論が展開されてきている。一向に成果が上がらない少子化対策や男女平等参画の取り組みでは子どもは方便として利用されているに過ぎないとして、それならいっそのこと選択の自由を認め（産みたい者だけが産めばいい）、低出生率を前提とした制度設計への転換を進めるべきだとする論や、気鋭の現代思想家や社会学者が娘をもつ生身の父親としての子育て体験を通じて、「遊びからの学び」がいかに子どもを成長させるか驚きをもって語り、子どもを中心とする絆ネットワークの可能性を探る論、同質の水平的な人間関係に自閉し摩擦や葛藤を回避するためキャラによって武装する子どもたちの優しさに、異質の他者と共存するための耐性を育てない教育の危機を訴える論、政治家や企業経営者やメディアの幼稚なふるまいが公然とまかり通る「大人のいない国」日本の成熟の度合いを逆説的に測ろうとする論、マンガ・アニメ・ゲーム・アイドル・コスプレに彩られた「軽薄」なジャパニーズ・ポップカルチャーのグローバル化と世界共通語に躍り上がってきている〝ＫＡＷＡＩＩ〟を手かがりに、「日

本的未成熟」のおおいなる可能性を探ろうとする論、などなど、トータルな視点で世界を捉え直す「概念としての子ども」論のあらたな展開がみられる。

このような「子ども系」子ども学研究の主流の流れとは別次元で芽ばえた子ども論の新しい息吹を、どう捉えたらよいだろうか。概念としての「子ども的なるもの」を掘り起こすことで、子どもから時代や社会のあり方を問い直し、硬直した近代知に変革を迫った1980年代の子ども論と今日のそれとはどこでどうつながるのだろうか。期待をもってその行方を追い続けたい。

---

〈引用・参照文献〉


・浜田寿美男『子ども学序説』岩波書店2009年
・中村勝美「子ども学研究の現在―1990年から2009年までを中心に―」『西九州大学子ども学紀要』第1号 2010年
・北本正章「子ども学の基礎概念に関する教育認識論的考察―子ども学研究の新展開に見るカテゴリーの分布と構成―」青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第54号2010年
・Ph．アリエス『〈子供〉の誕生―アンシャン・レジーム期の子供と家族生活―』みすず書房・日本語版1980年
・柄谷行人『近代文学における起源』講談社1980年
・中村雄二郎『魔女ランダ考』岩波書店1983年
・山口昌男『道化の宇宙』白水社1980年
・山口昌男・大江健三郎「原理としての子ども」『海』増刊号「子どもの宇宙」中央公論社1982年
・本田和子『異文化としての子ども』新曜社1982年
・小林登・小嶋謙四郎・宮澤康人・原ひろ子編『新しい子ども学』全三巻 海鳴社1985～86年
・東京大学公開講座『子ども』東京大学出版会1979年
・加藤尚武ほか編『現代哲学の冒険② 子ども』岩波書店1991年
・中井孝章『子ども学入門』日本教育研究センター2008年
・小林登『子ども学のまなざし』明石書店2008年
・小笠原道雄編『進化する子ども学』福村出版2009年
・浜田寿美男ほか『赤ずきんと新しい狼の世界』洋泉社2008年


※1980年代における「実態としての子ども」をめぐる状況は、首藤美香子「子どもの生活変容と世代文化」（皆川美恵子・武田京子編『児童文化』ななみ書房2006年）の一部を加筆修正したものである。